

シュンペーターの経済発展論における不確実性
—フランク・ナイトの不確実性との比較を通じて—

楠 木 敦

シュンペーターの経済発展論における不確実性 ——フランク・ナイトの不確実性との比較を通じて——

楠 木 敦

Atsushi KUSUKI

目次

- I はじめに
- II 不確実性の概念
 - 1 ナイトにおけるリスクと不確実性
 - 2 ナイトの不確実性とシュンペーターの不確実性
- III シュンペーターとナイトの方法論
 - 1 発生論的説明と二元論
 - 2 快楽的人間と精力的人間
- IV 企業者機能と利潤
 - 1 企業者機能
 - 2 利潤
- V 結び

[Abstract]

Schumpeter's Uncertainty in the Theory of Economic Development: A Comparison with Knight's Uncertainty

This study examines the concept of uncertainty as described in Schumpeter's *Theory of Economic Development* (1911) in relation to Knight's *Risk, Uncertainty, and Profit* (1921). Knight was well-acquainted with Schumpeter's *Theory of Economic Development* when writing the *Theory of Business Profit* (1916), which was published as *Risk, Uncertainty, and Profit*. As Schumpeter does not use the term 'uncertainty', this work endeavours to identify and examine his views on uncertainty, which remain unknown. Both Schumpeter and Knight categorise risk into measurable and unmeasurable; however, Knight terms the latter risk as 'uncertainty'. Therefore, it is possible to consider Schumpeter's unmeasurable risk as uncertainty. This ground-breaking investigation demonstrates that Schumpeter employed the concept of uncertainty before Knight. Schumpeter's methodology to explain economic development (evolution) presents a biological explanation and dualism, which Knight appears to have inherited. Furthermore, the two economic agents described by Knight and Schumpeter, the 'entrepreneur' and the 'rational economic man', are strikingly similar. Finally, Schumpeter and Knight explain profits by placing an entrepreneur at the centre of their theories, both concluding that there would be no profits without uncertainty. This study posits that Schumpeter's uncertainty is similar and inspirational to Knight's uncertainty.

I はじめに

これまで、シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950) の不確実性が、主題として分析の対象になったことはないように思われる。その理由は、シュンペーターを論じるにあたって、「不確実性」が当然の前提として考えられていたからではなく¹⁾、彼の「リスク (Risiko)」が取り上げられたとし

ても、誰がリスクを負担するのかといった主体の問題のみが注目され、リスクの内実が主題として明示的に分析されることがなかったからである²⁾。たしかに、Kanbur[1980]や、それを批判する本吉 [2003] は、シュンペーターのリスクを取り扱っている。しかし、シュンペーターの「リスク」を「予見できるリスク」と「予見できないリスク」とに分けて、後者の「予見できないリスク」を「不確実性」

キーワード：シュンペーター，フランク・ナイト，経済発展論，不確実性
Key words：Schumpeter, Frank Knight, Economic Development, Uncertainty

として論じることはしていない。また、「不確実性 (indeterminateness)」を論じる研究もあるが、本稿で取り扱うような不確実性は焦点化されていないこともあり、不確実性が十分に深く掘り下げられて分析されていない(八木 [2004]: 195-217頁, Yagi[2008], 武田 [2010])。このように、シュンペーターの不確実性がどのような性質を有したもののなのかということは、これまでほとんど分析されてこなかったといえる。

本稿は、ナイト (Frank Hyneman Knight, 1885-1972) の『リスク・不確実性および利潤』(1921年: 以下『利潤』と略記) を分析のための補助線として用いることによって³⁾、シュンペーターの経済発展論における不確実性の概念を詳らかにし、その不確実性が彼の革新と不可分な関係にあることを示す⁴⁾。このように、『利潤』と比較対照し、リスクと不確実性に焦点をあてるとともに、不確実性の視座から経済発展論を読み解くならば、シュンペーターが、リスク全般ではなく、予見できないリスクだけが利潤の源泉になると考えていたことが明らかとなるであろう。このことは、リスクと不確実性とを分けて考察することによって、はじめて可視化される⁵⁾。これらの論究はまた、経済学説史における通説とは異なり、同時代を生きたナイトや、同い年であったケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946) とともに、シュンペーターを、不確実性と深く結び付いた経済学者として捉え直すことをも可能にするであろう。

もっとも、本稿の分析の対象は、非常に限定されることになる。シュンペーターの経済発展論の多岐にわたる論点をすべて取り上げて検討することは、紙幅の関係上不可能なため、あくまでも経済発展論の要となる論点にだけ焦点を絞って考察する。

かくして、本稿では、以下のように、議論が展開される。まず、第II節では、ナイトの不確実性の概念と比較対照することで、シュ

ンペーターの不確実性の概念を詳らかにし、シュンペーターの革新が不確実性と表裏一体の関係にあることを明示する。次いで、第III節では、経済発展論が不確実性と密接に関連していることを明らかにするために、前節の内容を踏まえて、経済発展論の枠組みとしての舞台装置および登場人物を、『利潤』におけるそれらと比較対照しつつ、不確実性の視座から読み解いていく。続く第IV節では、『利潤』における企業者機能と利潤の定義とをそれぞれ比較考量の対象とすることで、不確実性の視座から、シュンペーターの企業者機能の定義を捉え返すとともに、利潤の定義を確認することで、不確実性が利潤の源泉であることを裏付ける。最後に、第V節では、これまでの議論をまとめる。

II 不確実性の概念

ここでは、ナイトの定義するリスクと不確実性の概念を概観した後、ナイトの不確実性の概念との比較対照によって、シュンペーターの不確実性の概念を詳らかにし、シュンペーターの経済発展論における不確実性の重要性を析出する。

1 ナイトにおけるリスクと不確実性

ナイトは、「測定し得る不確実性と、測定し得ない不確実性との間に引かれた区別を保持するために、われわれは前者を示すために『リスク (risk)』という術語を用い、後者を示すために『不確実性 (uncertainty)』という術語を用いてもよいであろう」(Knight[1921]: p.233, 訳306頁)と指摘する。くわえて、ナイトは、以下のように、不確実性のタイプを説明している。

われわれは「不確実性」という術語を定量化できないタイプ (non-quantitative type) の場合にのみ限定するであろう。それはまったく「真の」不確実性であり、すでに議

論されたごとくリスクではない (p.20, 訳66頁)。

このように、リスクは数量的に測定可能であるが、不確実性はそうではないという。そして、ナイトは、以下のように、リスクと不確実性の違いを説明する。

リスクと不確実性の2つのカテゴリーの間における実際の相違は、前者では、一群の事例において結果の分布は（アプリアリに計算を通じてか、または過去の経験による統計のいずれかにより）知られているが、不確実性の場合には、これは真実ではない。なぜなら、一般に、扱われる事態が高度に唯一無二であるために一群の事例を形成することが不可能だからである (p.233, 訳306頁)。

リスクの場合は、アプリアリに結果の分布を算定すること、または過去の経験に基づく統計から結果の分布を算定することが可能となる。すなわち、リスクの場合は、保険の原理での対処が可能となる。しかし、不確実性の場合には、唯一無二の現象であることから、結果の分布さえ算定することができず、なおのこと事前に結果を知ることができないのである。

2 ナイトの不確実性とシュンペーターの不確実性

それでは、前項で見たナイトの不確実性の概念との比較対照を通じて、シュンペーターの不確実性の概念を詳らかにしたい。シュンペーターは、リスクという術語を使用しているが、不確実性という術語を使用することはなかった。このように不確実性という術語を使用していないということが、これまでシュンペーターの不確実性が主題として分析の対象になることがなかった要因の1つであった

と思われる。このようなシュンペーターであるが、実は、リスクを、「予見できるリスク」と「予見できないリスク」に分けて考察を行っている。

まず、予見できるリスクがどのようなものであるのかを確認する。シュンペーターは、予見できるリスクについて、以下のように説明している。

経済にとっては2種類のリスクが問題となる。生産の技術的失敗のリスク——これにさらに自然現象によって惹き起こされる財の損失のリスクをも含めることができよう——およぼ実業上の損失のリスクである。これらのリスクが予見される限りにおいては、それらは直接に経済計画に影響する。経済主体はリスクに対するプレミアムを費用の計算の中にくわえるか、あるいはある種のリスクを避けるための出費をするであろう (Schumpeter[1911]: S.49: 強調は引用者)。

シュンペーターは、リスクが予見できる場合に、経済主体はリスクを除去しようとする」と述べる。そして、「経済的リスクを除去するこのような手段は、原則としてなんら利潤の原因となるものではない」(S.49)と指摘する。さらに、シュンペーターは、予見できる「リスクに対するプレミアムも生産者にとっては利潤の源泉ではない。それはせいぜい主として多くのリスクを組み合わせることによって、これから中間的利潤をあげることのできる保険会社に対してそうであるにすぎない。なぜなら、このプレミアムはやがて必要となった場合に請求されるからである」(S.49-50: 強調は原著者)と説明する。すなわち、「より大きなリスクに対する補償がより大きな収益に見えるのは単に外見上のことにすぎない。それはまさにある確率係数を乗すべきものであり、これを乗ずれば、その

実際の価値は再びこのプラスの金額だけ下落する」(S.50：強調は引用者)というのである。このように、予見できるリスクに対するプレミアムは、一見すると利潤のように見えるのであるが、実際には確率係数を乗じるために、利潤にはならないとシュンペーターは指摘する。この指摘から読み取れる重要なことは、シュンペーターが、予見できるリスクの生起を確率で表わすことができると想定していることである。

ナイトも、シュンペーターと同じように、「たとえ実業家が個々の事業活動の結果を事前¹に知ることができなかつたとしても、もし一切の可能な結果の確率に関する数量的知識が得られるならば、彼は競争的な企てを精確な将来の予見に基礎付けて活動することができるであろう」(Knight[1921]：pp.198-199, 訳268-269頁：強調は引用者)と指摘している。その理由として、ナイトは、「(彼自身の事業のみであろうと実業一般であろうと)大多数の事業活動を基礎として算出することによって、損失は固定的な諸費用に換算されるはずだからである」(p.199, 訳269頁)と説明する。そして、ナイトは、「これは他の一切の必要な支出と同じように単なる費用であって、費用と販売価格との間の差異であるところの利潤を生み出しはしないであろう」(p.199, 訳269頁)と述べ、シュンペーターと同じような結論を導き出している。

次いで、シュンペーターの予見できないリスクがどのようなものであるのかを確認する。シュンペーターは、予見できないリスクについて、以下のように説明している。

リスクが予見できないか、あるいはいづれにせよ経済計画の中に考慮されない場合には、事態は異なってくる。その場合にはリスクは一方においては損失の源泉となると同時に、他方においては利潤の源泉となるであろう。……このような利

潤および損失のもっとも豊富な源泉は、……与件の自発的な変化である。それは、新しい状態を創造するものであって、これに適應するためには時間を必要とする (Schumpeter[1911]：S.50：強調は引用者)。

このように、シュンペーターは不確実性という術語を使つてはいないものの、ここで説明されている「予見できないリスク」とは、この後すぐに見るように、ナイトの不確実性と通底する概念であると考えられる。この予見できないリスクは、与件の自発的な変化それ自体と表裏一体の関係にある。そして、与件の自発的な変化は、新しい状態を創造するという説明にあるように、「創造的役割」(S.33)を担う企業者によって惹き起こされる革新の別名である。革新は、自発的で非連続的な変化であり (Schumpeter[1926]：S.98-99, 訳[上]179頁)、かつ不可逆的な変化である⁶⁾。さらに、革新は、質的に新しい現象であり⁷⁾、個別性と一回性を特徴とし、革新以前の経済状態とは断絶した新しい経済状態を生み出す。それゆえ、革新は、「すべての関連した事実を完全に知った観察者の立場から事後的に理解できるにすぎない。事前には、事実上、けつして理解できない。……いかなる決定論的信条もこれに対して抗することはできない」(Schumpeter[1946]：pp.411-412, 訳336-337頁)ことになる。すなわち、革新を遂行する前には、何が革新であり、何が革新でないのかは分からない。革新が成功してはじめて、革新であったということが遡及的に理解できるにすぎないのである。

以上のことから、次のように、革新の性質を6つにまとめることができるであろう。第1に、創造的な変化、第2に、自発的(内生的)な変化、第3に、非連続的な変化、第4に、不可逆的な変化、第5に、質的な変化、第6に、予見不可能な変化、である。これらの性質からは、革新と表裏一体の「予見でき

ないリスク」が、ナイトの不確実性と同一ように、定量化できないため、結果を算定することができず、事前にはけっして結果を知ることができないものであるということが理解できるであろう。すなわち、予見できないリスクは、不確実性の別名なのである。

また、シュンペーターと平仄を合わせるかのように、ナイトは、「われわれの行為の論理は、真の不確実性、真の変化、非連続性を想定する」(Knight[1921]:p.314, 訳391頁: 強調は原著者)と述べ、「ベルクソンの(すなわち、ヘラクレス的)意味における『真の変化』があるかぎり、理論付けが不可能であることは明白と思われる」(p.209, 訳279頁)と指摘している。他方で、シュンペーター自身も経済発展論の集大成である『景気循環論』(1939年:以下『景気』と略記)を名指しして、「創造的進化(évolution créatrice)のようなものが存在する」⁸⁾と指摘し、ベルクソンに言及している。これら両者の指摘は、シュンペーターの革新が真の変化であること、そのために理論付けは不可能であり、不確実性と不可分な関係にあることを裏付けているであろう。そして、不確実性の説明に際して、ナイトもシュンペーターも、ベルクソンを援用しているということが、両者の不確実性に類似性が存在していることの傍証であるように思われる⁹⁾。シュンペーターは、「結果の算定可能性が、『ヴィジョン(vision)』を抹消し去るであろう」(Schumpeter[1950]:p.133, 訳208頁)と指摘し¹⁰⁾、事前に革新の結果を予見できないがゆえにヴィジョンが必要とされるのであって、不確実性が存在せず、革新の結果が算定できるのであれば、企業者のヴィジョンは無用化されるという。

かくして、シュンペーターが革新を中核に据えて経済発展論を展開していることを、革新と不確実性との表裏一体の関係を踏まえた上で、裏側から眺めるならば、シュンペーターは不確実性を中核に据えて経済発展論を展

開しているということができよう。すなわち、シュンペーターは、すでに『経済発展の理論』(1911年:以下『発展』と略記)において、ナイトの主張する意味におけるリスクと不確実性とを分けて論じていたといえるのである。また、利潤の定義については、第IV節の第2項で詳しく見るが、シュンペーターは、ナイトに先んじて不確実性が利潤または損失の源泉であることも指摘していたのである。しかし、シュンペーターは革新を論じる際に、不確実性を前面に押し出して論じることをしなかったがために、不確実性が革新の陰に隠れてしまい、結果的に、シュンペーターの経済発展論において不確実性が重要な位置を占めていたことが見え難くなってしまった¹¹⁾。このようなことから、「フランク・ナイトが、経済学に対して独創性に富む貢献をなした『リスク・不確実性および利潤』の中で、不確実性に対するシュンペーターの無視を矯正した」(Brouwer[2002]:p.91: 強調は引用者)といった評価を生み出すことになったと思われるが、実際には、シュンペーターはナイトの主張する意味における不確実性を無視するようなことはしていなかったのである¹²⁾。

とはいえ、両者の目的とするところは異なっていた。『発展』におけるシュンペーターの主眼は、経済発展のメカニズムを理論的に解明することであり、企業者の遂行する革新を基軸にして経済発展のメカニズムを説明することにあつた。これに対して、『利潤』におけるナイトの主眼は、完全知識の前提が持つ理論的な意味と限界を剔抉し、これまでの経済理論によって無視されてきた真の不確実性を、その正当な地位へ据えることであつた(Knight[1921]:p.231, 303頁)。このような異同がありつつも、両者の不確実性の概念それ自体は、数量化して捉えることができないため、結果を算定することができず、事前には結果を知ることができないという定義か

ら、類似しているといえる。次節以降では、両者の異同に触れつつ、不確実性の視座から、経済発展論を読み解いていく。

III シュンペーターとナイトの方法論

ここでは、経済発展論が不確実性と密接に関連していることを明らかにするため、前節の内容を踏まえて、経済発展論の枠組みとしての舞台装置および登場人物を、『利潤』におけるそれらと比較対照しつつ、不確実性の視座から読み解いていく。経済発展論の舞台装置は、発生論的説明に基礎付けられた、静態の理論と動態の理論の二元論から構成されており、登場人物として、静態の理論には快樂の人間が対応しており、動態の理論には精力の人間が対応している。

1 発生論的説明と二元論

シュンペーターは、経済発展の生成を分析する際に、「発展のない場合」と「発展のある場合」とを区別する。その際に、シュンペーターは、「どのような具体的な発展過程も先行する発展に依存している。しかし、事物の本質を鋭く洞察するために、われわれは、この点を捨象し、発展を無発展の状態から生起させることにしよう」(Schumpeter[1911]: S.107)と述べ、発生論的説明を採用するのである。それは、発展のない状態に発展を導入するという分析方法を意味している。他方で、和田([2015]: 96頁)も指摘しているように、ナイトは、不確実性を分析する際に、「不確実性のない場合」と「不確実性のある場合」とに分け、不確実性のない状態に不確実性を導入するという分析方法を採用している。ナイトは、不確実性の影響を考察する際に、「最善の方法は、不確実性がない社会を取り上げることで、次いで不確実性が導入されたとして、その構造にいかなる変化が起こるかを確かめようとするのである」(Knight[1921]: p.264, 訳338頁)と説

明している。このナイトの説明にある「不確実性」を「発展」に置き換えて読むならば、それはそのままシュンペーターの「発展」の分析方法の説明となるであろう。このように、ナイトとシュンペーターとは同じ方法論、すなわち発生論的説明に基礎付けられた二元論という方法を採用しているということができよう。

それでは、シュンペーターの発展のない場合とナイトの不確実性のない場合とを、比較してみよう。シュンペーターの発展のない場合とは、静態の理論であり、「同一状態にとどまる経済の循環」(Schumpeter[1911]: S.57)として描写されている。すなわち、「時間的に一定の速さで流動し続け、単にそれ自体を再生産するにすぎない不変の経済過程のモデル」(Schumpeter[1939]: [I]pp.35-36, 訳 [I]50頁)として組み立てられている。そこでは、経済が年々歳々あるがままの状態を続け、「生産過程は、まったく『同時化』されている。というのは、生産の結果が待たれるということがなく、結果が一致することを欲せられた瞬間に、すべての生産の結果は現われるからである」([I]p.40, 訳 [I]56頁)。このように、発展のない場合には、企業者が存在しないため革新が惹き起こされることもなければ、企業者利潤も存在しない¹³⁾。

他方で、ナイトの不確実性のない場合とは、静的状態であり、「すべての所与の諸要因および諸条件は絶対的に変化しないままである」(Knight[1921]: p.79, 訳133頁)と説明されている¹⁴⁾。そこでは、「各人は、生産されるやいなや消費されてしまう完全な商品を継続的に生産する」(p.78, 訳131頁)のであり、「完全な知識が理論的に可能なように作られた世界では、すべての組織的調整はまったく機械的となり、すべての組織は自動的となるであろう」(p. 268, 訳341頁)とも述べられている。そして、ナイトは、「理想的交換では、交換された諸量は価値に置き換えると等

価であり、そこにはなんら『利潤』のようなものが生じる機会はないということも自明である」(p.86, 訳138頁)と指摘する。ナイトは、「既知の法則に従う変化(それをわれわれが変化と呼ぶと否にかかわらず)は、不確実性を生起しない。われわれが静的世界という語で実際に意味していることは、すべての変化がこのような性質を持つ世界である」(p.313, 訳390-391頁)という。このように、シュンペーターの発展のない場合もナイトの不確実性のない場合も、利潤が存在しないのである。

次いで、シュンペーターの発展のある場合と、ナイトの不確実性のある場合とを、比較してみよう。シュンペーターの発展のある場合は、動態の理論であり、企業者によって惹き起こされる創造的な変化が存在する状態として描写されている。企業者の革新は、前節の第2項で見たように、不確実性と不可分な関係にあった。そして、シュンペーターによれば、創造的な変化である革新からのみ利潤が生み出されるのであった。他方で、ナイトの不確実性のある場合は、ナイトが、「利潤の原因は、変化ではあり得ない」(p.37, 訳85頁)と指摘しているように、利潤は、変化それ自体からではなく、変化にともなう不確実性から生み出されると捉えられている。もちろん、ナイトは、「なんらかの変化がない限り、利潤はないであろうということは真実である」(p.37, 訳85頁)と述べているように、利潤を変化と結び付けること否定するのではなく、利潤を生み出すのが、変化それ自体ではなく、変化にともなう不確実性であると指摘しているにすぎない。換言すれば、ナイトは、われわれの問題の理解にとって決定的なのは、変化自体ではなくて、変化の結果といった将来に関するわれわれの不完全な知識であり(p.198, 訳268頁)、われわれに未来の結果を完全に予見することができない不確実性をともなった変化こそが、利潤を生み出す

というのである。だからこそ、ナイトは、「動的変化は変化とその結果が性質上予測できない限りにおいてのみ、収入の特別な形態〔利潤〕を生み出す」(p.37, 訳85頁)と説明するのである。ナイトによれば、このような不確実性に企業者が上手く対処することによってのみ利潤が生み出されるのである。

かくして、発生論的説明を採用することによって、シュンペーターの場合は静態の理論と動態の理論の二元論として、ナイトの場合は不確実性のない場合と不確実性のある場合の二元論として、理論が構築されており、そこに類似性を読み取ることができるであろう。そしてまた、前節の論究を敷衍するならば、シュンペーターの「発展のない場合」と「発展のある場合」の二元論は、「不確実性のない場合」と「不確実性のある場合」の二元論として読み替えることができるであろう。

2 快樂の人間と精力的人間

シュンペーターは、『発展』で、経済主体の行動を基準とした、静態の理論に対応している「快樂的な行動」の類型と、動態の理論に対応している「精力的な行動」の類型を描写している(Schumpeter[1911]: S.127-129)。

まず、シュンペーターの静態の理論に対応した快樂の人間は、快樂の計算機械ないし到富欲に専一的に支配された経済主体である。ただし、快樂の人間は、慣行の循環に適応するだけの人間であり、循環の与件を変更しようとする動機を持っていないため、循環の与件をみずからの行為によって変更することがない。すなわち、快樂の人間は、与件に適応する受動的な経済主体として描写されており、利潤を生み出す経済主体ではない。快樂の人間は、ナイトの分析における不確実性のない場合の合理的に行動する受動的な経済主体と対応関係にあると考えられる。ナイトによれば、不確実性が存在しない場合を考える

に際して、「人間の行動が、意識的動機によって支配されていると仮定する。つまり、より一層普通に表現されているように、それらが、『欲望の満足』に対して向けられていると仮定する」(Knight[1921]: p.52, 訳108頁)とともに、「社会の成員たちは、完全に『合理的』に行動する」(p.76, 訳130頁)と仮定されている。不確実性が存在しない場合には、経済主体は、「行為の結果を絶対的に知っており、その結果に照らして行為をなすことになっている」(p.77, 訳130頁)。このように、ナイトの場合にも、「企業者が唯一の能動的な主体であり、それ以外は確実な契約所得を享受する受動的な労働者や資材提供者、消費者として理念化されている」(黒木 [2001]: 47頁)のである。

次に、シュンペーターの動態の理論に対応した精力的人間は、快樂的人間とは対照的に、行為のもたらす快樂と苦痛の差引計算を行為の基準として行動するのではなく、「社会的な権力の座に対しての喜びと創造的な造形作業に対する喜び」(Schumpeter[1911]: S.138)を動機として能動的に行動する経済主体である。精力的人間は、企業者の別名であり、外形的または数値的な証拠では基礎付けられない創造性を担い、経済の与件を創造的に変更し、利潤を生み出す。シュンペーターは、快樂的人間だけしか存在しない静態の理論の枠組みの中に、企業者をはめこむことによって発展の生成のメカニズムを分析する。精力的人間は、ナイトの分析における不確実性のある場合の能動的な経済主体、すなわち、ナイトの企業者と類似しているということができるであろう。というのも、ナイトにあっては、「生産活動を組織し、社会に競争的な秩序をもたらす企業者はまた、経済発展を牽引する唯一の創造的の主体でもある」(黒木 [2001]: 47頁)と指摘されているからである。

しかしながら、ナイトの場合には、次節で

も触れるように、企業者の企業組織に対する役割が描写されているのに対して、シュンペーターの場合には、精力的人間の指導力が強調されているにもかかわらず、企業組織に対する企業者の役割が詳細には描写されていないため、その具体的内容はブラックボックスとなっている。

かくして、異同があれども、両者の方法論における経済主体の類似性を踏まえるならば、快樂的人間は、利潤を生み出すという意味では不確実性に対処することができない人間類型として、精力的人間は、みずから不確実な状況を創出し、その不確実性に対処することによって利潤を生み出す人間類型として、それぞれを読み替えることができるであろう。

IV 企業者機能と利潤

ここでは、シュンペーターが、「発展なしには企業者利潤はなく、企業者利潤なしには発展はない」(Schumpeter[1911]: S.322)と指摘していることを踏まえ、『利潤』における企業者機能と利潤の定義とをそれぞれ比較考量の対象とすることで、不確実性の視座から、第Ⅲ節の第2項で考察した精力的人間の企業者機能の定義を捉え返すとともに、その精力的人間が取得する利潤の定義を確認する。これらの分析からは、シュンペーターの企業者機能と利潤とを、不確実性と密接に関連したものとして読み解くことができ、かつ予見できるリスクではなく、不確実性が利潤の源泉であることが裏付けられるであろう。

1 企業者機能

まず、シュンペーターの企業者機能を確認する。シュンペーターにあっては、企業者機能は、ひとりの人間の中で永続するものとは捉えられておらず、一時的に発現する機能と考えられている。すなわち、企業者は、職業の一種としてではなく、機能として考えられ

ていることになる。その意味から、シュンペーターは、「企業者というものを、資本家、リスク負担者、単なる技術的ないしは商業的経営指導者、および自己負担に立って活動する静態的経済主体からきっぱりと分離する」(Schumpeter[1911]: S.515-516) のであり、「もし事が失敗すれば、損失を蒙るのは信用供与者である」(S.290) というのである。このことにくわえて、シュンペーターは、以下のように説明している。

……企業者が以前の企業者利潤から自己金融をするか、あるいは彼が彼の「静態的」経営の生産手段を用いるとしても、リスクは企業者としての彼にかかるのではなく、貨幣貸与者ないし財貨所有者としての彼にかかるのである (S.290)。

このように、シュンペーターは、たとえ企業者が自己資金から事業を展開することができたとしても、損失を負担するのは、企業者ではないと述べ、企業者機能を損失負担の機能から完全に分離する。企業者機能の定義は、革新を遂行することに限定されるのである (Schumpeter[1946]: p.412, 訳338頁)。くわえて、地位や肩書、さらには時代や社会制度に関係なく、革新を遂行した人物が、事後的に企業者と呼ばれる。すなわち、企業者になる可能性が誰にでもあり、革新を完遂する前には、企業者を名指すことができないのである。シュンペーターによれば、企業者は、自分の引き受けなければならない努力が、十分な享樂のための余剰を約束するかどうかを、常に不安げに問うみじめな人物ではなく (Schumpeter[1911]: S.137), いかなる産業の歴史も、企業者の精力的な意欲と行動とに、つまり、経済生活にそなわるもっとも強力な、もっとも輝かしい事実に戻すというのである (S.487)。そして、企業者の意志の強さが強調される。というのは、シュンペ

ーターが、革新の成否というものが事前に誰にも予見できない不確実性に満ちた世界を突き進むためには、意志の力が必要になると考えていたからであろう。もちろん、そのような力は、企業者に対して未来の結果に関する完全な知識をもたらすものではなく、他の経済主体に企業者としての影響を与えるにすぎない。さらに、シュンペーターは、このような企業者はいずれ日常的な経営管理を行なう単なる管理者となる運命にあり、「企業者そのものは、一社会階級を形作るものではない」(Schumpeter[1939]: [I]p.104, 訳 [I]151頁) と述べる。

また、シュンペーターによれば、欲望は、経済発展のエンジンではなく、経済発展によってひっぱられ、覚醒させられるものである (Schumpeter[1911]: S.485)。シュンペーターは、新しい欲望そのものが孤立的に存在するかぎり、経済にとってはなんらの実際効果も持たないのであって (S.485),

「経済における革新は、新しい欲望がまず消費者の間に自発的に現われ、その圧力によって生産機構の方向が変更されるというふうに行なわれるのではなく、……むしろ新しい欲望が生産の側から消費者に教え込まれ、したがって、イニシアティブは生産の側にあるというふうに行なわれるのが常である」(Schumpeter[1926]: S.100, 訳 [上]181頁) と指摘している。

次に、ナイトの企業者機能を確認する。ナイトの企業者とは、制度の中心人物であり、特別な機能(function)を持つ(Knight[1921]: p.xi, 訳3頁: 初版への序文)。この特別な機能は、2つある。1つ目は、「責任ある統御(control)を果たすこと」(p.278, 訳351頁) である。この1つ目の機能に関して、ナイトは、以下のように説明している。

経営者機能が誤謬の可能性を含む判断の執行を要求されるようになり、その結果、彼

の意見の精確さに対する責任を引き受けることがグループの他のメンバーを経営者の命令に従わせるための必須条件となる場合には、機能の性質は変革される。つまり、経営者は企業者となる (p.276, 訳349頁: 強調は原著者)。

こうして、「新しい経済的職能者, すなわち, 企業者に出会う」(p.268, 訳341頁) ことになる。そして、この責任ある統御は、不確実性の負担と分離できないという (p.350, 訳429頁)。ナイトが、「最終的な経営者 [企業者] は、市場においてすべての他の競り人との競争で、全体として、組織を計画し、職務を配置し、職務に人を選び、そして組織のためにそれらの価値を評価する人である」(p.308, 訳383頁) と指摘するように、ナイトの不確実性には、適材適所に人を配置することにもなう不確実性も含まれている¹⁵⁾。特別な機能の2つ目は、「収入における不確実性と変動に対して、生産用役の所有者に保証すること」(p.278, 訳351頁) である。ナイトは、「この保証的機能は明らかに統御のそれと共にゆかざるを得ない。実際、統御の究極的な意味において、この2つは理論的にさえ分離できない」(p.278, 訳351頁) という。そのため、生産用役の所有者に対して所得を保証するだけの十分な担保能力を有さないのであれば、企業者になることはできないと述べる¹⁶⁾。ナイトは、企業者を「批判的でためらいがちな人ではなく、むしろ休みなきエネルギーや軽快な楽観主義をそなえた、ものごと全体と特に自分自身に大いなる自信を持つような人」(p.366, 訳444-445頁) であり、「自身の幸運について不合理に高い自信を持っている」(p.366, 訳444頁) と指摘する。また、ナイトは、将来に関する欲望の予期と生産の統御の問題の解決は、「すでに消費者自身から移されて、さらに生産者の大部分の手中からも取り去られて、『企業者』または『経営者』

という限定された階級的手中に委ねられている」(p.244, 訳318頁) と述べる。このように、シュンペーターと同じく、ナイトも「生産者が、消費者の欲望を先見することの責任を引き受ける」(p.268, 訳341頁) と捉えているのである。

それでは、両者の企業者機能における相違点と類似点をまとめてみよう。まず、相違点は、次の3つである。第1に、シュンペーターは、企業者機能を一時的にしか発現しないものとして捉えていたが、ナイトは、企業者機能を永続するものとして捉えていた。第2に、シュンペーターは、企業者そのものは企業者階級を形成するものではないと想定していたが、ナイトは、「一階級としての企業者たち」(p.363, 訳442頁) を想定していた。第3に、シュンペーターは、失敗した場合の損失の負担という機能は企業者機能に含まれないと看做していたが、ナイトは、企業者機能には失敗の損失を負担することも含まれると看做していた。次いで、類似点は、次の2つである。第1に、両者とも企業者機能を中心に据えることによって利潤の発生を説明していた。第2に、両者とも消費者の欲望を先見することの責任は、企業者(生産者)が引き受けると捉えていた。

かくして、シュンペーターの場合には、ある経済主体が、一時的に有する企業者機能のもと、みずから不確実な状況を創り出し、そのようなみずから創出した不確実性に巧みに対処することで革新を完遂させ、利潤を得てはじめて、事後的に企業者と呼ばれることになる。ただし、シュンペーターの企業者機能には失敗した場合の損失の負担という機能が含まれていないことから、ナイトの企業者の定義からすれば、シュンペーターの企業者は企業者ではなく、企業者に購買力を提供する唯一の存在である銀行家が企業者ということになるであろう¹⁷⁾。このように、前述した3つの相違点も含め、相違がありつつも、シュ

ンペーターの企業者機能における革新の遂行それ自体は、不確実性と密接に関連したものであるといえる。

2 利潤

まず、シュンペーターが、企業者の取得する利潤をどのような利得として定義していたのかを確認する。シュンペーターは、企業者利潤を、「事業経営における収入と支出との差額である」(Schumpeter[1911]: S.278)と看做しており、「企業者利潤は、原則として経済的意味での賃金とはならない」(S.302)と指摘する¹⁸⁾。すなわち、利潤は賃金ではなく、費用超過額だということである。それゆえ、「企業者利潤の大きさは、循環における所得の大きさのように確定的には規定されない」(Schumpeter[1926]: S.237, 訳[下]54頁)ことになる。他方のナイトは、利潤をもたらすのは、予想された状態とそれに基づいて事業取引がなされた実際の状態との相違であるため(Knight[1921]: p.38, 訳86頁)、「任意の個人が企業者となった後は、彼の収入の総額は、予想された余剰を生産する際の彼の成功に依存する」(p.281, 訳354頁)と説明する。それゆえ、「ある意味で、企業者の収入は、けっして『決定された』ものではない。それは、その他が『決定された』後に、『残されたもの』である」(p.280, 訳353頁)のであって、「企業者の収入は、固定されたものではなくて、固定収入が支払われた後に残るものすべてから成り立っている」(p.280, 訳353頁)ということになる。ナイトの場合も、企業者の手にする利潤を賃金と区別しているため(pp.308-309, 訳384-385頁)、利潤は賃金ではなく、費用超過額だということになる。

次いで、シュンペーターの利潤が予想できないリスクからのみ生み出されるということを確認しておく。これまで見てきたように、シュンペーターは、利潤を生み出す革新が不確実性と表裏一体の関係にあると捉えてい

た。すなわち、シュンペーターもナイトも、不確実性を負担することによって、企業者は利潤を得ると考えていた。前項で確認したように、ナイトとは異なり、シュンペーターの場合には、企業者の不確実性の負担には、革新の企ての失敗による損失の負担は含まれていなかったが、革新の完遂という不確実性への巧みな対処は含まれていた。そして、両者は、事前に確定することができない費用超過額として利潤を定義していたのであるが、この費用超過額は、不確実性に対処でき、企業者の企てが成功することによって、はじめて生じるものであった。これらのことを踏まえるならば、シュンペーターの場合にも、利潤は不確実性を源泉としてのみ生み出されると捉えられていたといえるであろう。

かくして、両者の利潤の捉え方には、次の3つの類似点がある。第1に、利潤が費用超過額によって定義されていた。第2に、利潤の額は事前には未確定であると捉えられていた。第3に、不確実性だけが利潤を生むと捉えられていた。これらの類似点は、シュンペーターにおいても、利潤が不確実性と密接に関連していること、そして、すべてのリスクが利潤の源泉になると考えられていたのではなく、予見できないリスクだけが利潤の源泉になると考えられていたということも裏付けているであろう。

V 結び

本稿では、これまで深く掘り下げて論じられることのなかったシュンペーターの不確実性の概念を考察してきた。その一連の考察は、次のようにまとめることができる。

シュンペーターとナイトそれぞれの分析の目的が異なっていたにもかかわらず、類似性が存在しており、シュンペーターは、すでに『発展』で、ナイトの主張する意味におけるリスクと不確実性とを区別し、利潤と損失の発生を分析していた。すなわち、シュンペー

ターは、ナイトの不確実性の概念と通底した、「予見できないリスク」としての不確実性の概念を取り扱っていたのであった。この予見できないリスクとしての不確実性は、革新と表裏一体の関係にあった。

そして、シュンペーターとナイトの方法論として、発生論的説明を基礎とした二元論、およびその二元論に対応した人間類型が、類似性を有していた。二元論に関しては、両者とも、発生論的説明を採用し、シュンペーターの場合には、静態の理論と動態の理論の二元論として、ナイトの場合には、不確実性のない場合と不確実性のある場合の二元論として展開されていた。また、二元論に対応した人間類型に関しては、シュンペーターの静態の理論に対応した快樂の人間が、ナイトの不確実性のない場合の合理的に行動する受動的な経済主体と類似性を有しており、シュンペーターの動態の理論に対応した精力的人間が、ナイトの分析における不確実性のある場合の能動的な経済主体、すなわち、ナイトの企業者と類似性を有していた。しかしながら、ナイトの場合には、企業者の企業組織に対する役割が描写されているのに対して、シュンペーターの場合には、企業組織に対する企業者の役割がブラックボックスになっているという相違が存在した。これらの比較分析からは、相違がありながらも、シュンペーターの経済発展論が不確実性と不可分な関係にあることが読み取れた。

さらに、シュンペーターの企業者機能と利潤を、ナイトのそれらとそれぞれ比較考量した。まず、企業者機能における相違点は、次の3つであった。第1に、シュンペーターは、企業者機能を一時的にしか発現しないものと捉えていたが、ナイトは、企業者機能を永続するものとして捉えていた。第2に、シュンペーターは、企業者そのものは企業者階級を形成しないと想定していたが、ナイトは、企業者階級というものを想定していた。第3に、

シュンペーターは、失敗の損失を負担することは企業者機能ではないと看做していたが、ナイトは、失敗の損失を負担することも企業者機能であると看做していた。次いで、両者の企業者機能における類似点は、次の2つであった。第1に、企業者機能を中心に据えることによって利潤の発生が説明されていた。第2に、消費者の欲望を先見することの責任は、消費者ではなく、企業者が引き受けるべきものであると捉えられていた。最後に、利潤における類似点は、次の3つであった。第1に、利潤が費用超過額によって定義されていた。第2に、利潤の額は事前には未確定であると捉えられていた。第3に、不確実性だけが利潤を生むと捉えられていた。このように、企業者機能における相違点と類似点、および利潤における類似点の析出を通じて、シュンペーターの企業者機能と利潤とが、不確実性と密接な関係にあることを確認した。

かくして、『利潤』と比較対照することで、シュンペーターの不確実性の概念を詳らかにし、革新と表裏一体であった不確実性が経済発展論において重要な位置を占めていたことが明示できたであろう。くわえて、シュンペーターは、すべてのリスクが利潤の源泉となるのではなく、予見できないリスクだけが、利潤の源泉になると考えていたことも可視化することができたであろう。さらに、シュンペーターを不確実性の概念と深く結び付いた経済学者として位置付け直すことも可能になったと思われる。

〔付記〕

本稿は、2017年度経済学史学会北海道部会第2回研究報告会、経済学史学会第82回大会の報告に基づいている。また、本稿では、結果的に、ナイトの博士論文「企業利潤の理論」(Knight[1916])を十分に活用することができなかったが、そのコピーを入手できたのは松山直樹氏の助言のおかげであった。ここに

記して感謝を申し上げます。

〔注〕

- ¹⁾たとえば、Brouwer[2002]は、「不確実性に対するシュンペーターの無視」(p.91)と指摘し、本吉[2003]も、「〔シュンペーターの経済発展論に〕ナイトの言うところの不確実性は存在していないと思われる」(32頁)と指摘している。
- ²⁾たとえば、伊東・根井[1993]の132-137頁を参照。
- ³⁾酒井[2010]が、「ナイトとシュンペーターの関係は、従来軽視されがちであったことは否めず、まことに不可思議な話と言わねばならない」(129頁)と指摘している。
- ⁴⁾本稿では、「新結合」、「革新」、「創造的破壊」、「創造的反応」の各術語を、同一の意味内容を持つ概念であることから、代替可能な術語として取り扱う。詳しくは、楠木[2012]の71頁の注2を参照。
- ⁵⁾本稿では、晩年のシュンペーターが、利潤理論への貢献として、「われわれが後者〔ナイト〕に負っているのは、保険を付けることができるリスクと保険を付けることができない不確実性との区別における有益な強調である」(Schumpeter[1954]:p.894, 訳[5]1891頁)と評価していることに鑑み、『利潤』を取り上げる。さらに付言すれば、次のような両者の関係性も、関連付けて分析する理由となる。ナイトは『利潤』の元となった博士論文「企業利潤の理論」(1916年)を、ヤング(Allyn Abbott Young, 1876-1929)の指導の下に書き上げたのであるが(Blitch[1995]:p.121)、そのヤングはシュンペーターと親友であり、『発展』の内容を知っていた(p.43)。そして、ナイト自身が「企業利潤の理論」や『利潤』の中で、『発展』に言及している。さらに、Hart[2012]も、「ナイトは、静学と対比した動学の問題に関する彼自身の考え方へのシュンペーターの影響の重要性をあげすけなく認めた」(p.169)と指摘している。
- ⁶⁾シュンペーターは、「……ものごとくやり方におけるこの歴史的で不可逆的な変化を、『革新』と呼ぶ」(Schumpeter[1935]:p.138, 訳51頁)と指摘している。
- ⁷⁾シュンペーターは、次のように、指摘している。「ここでは人口の増加や富の増加によって示されるような経済の単なる成長も発展過程とは看做されない。なぜなら、これによって惹き起こされるものは質的に新しい現象

ではなくて、たとえば自然的与件の変化の場合と同様な適応過程にすぎないからである」(Schumpeter[1926]:S.96, 訳[上]175頁)。

- ⁸⁾Stolper[1994]に所収。マルシャックによるシュンペーターの『景気』の書評に対する、シュンペーターのコメントであり、引用は、p.375からである。マルシャックは書評の草稿をシュンペーターに送り、コメントを求めた。マルシャックがシュンペーターのコメントを読んだか否かに関しては不明であるが、彼の書評は、Marschak[1940]として刊行されている。また、引用文中の創造的進化という術語がフランス語で表記されていることから、フランスの哲学者ベルクソンの提唱した創造的進化を指し示していると思われる。さらに、『発展』と『景気』の間に理論的な連続性が存在していることを考えるならば、ここでの『景気』に対する指摘は『発展』にも遡及的にあてはまると思われる。
- ⁹⁾伊東・根井([1993]:197頁)や楠木[2011]は、シュンペーターに対するベルクソンの影響を指摘しており、McKinney([1977]:pp.68-69)やKasper([2002]:p.28fn)は、ナイトに対するベルクソンの影響を指摘している。これらを勘案するならば、両者の不確実性は、ベルクソンに淵源している可能性が考えられる。しかしながら、紙幅の都合上、この興味ある論点には立ち入ることができない。
- ¹⁰⁾シュンペーターのヴィジョンの詳細は、Schumpeter([1954]:p.41, 訳[1]79頁)を参照。
- ¹¹⁾ナイトが、「現実の単純化における主要な完全競争の成立の必要条件は、最初からずっと強調してきたように、競争的システムのすべての成員の要素における事実上の全知の仮定である」(Knight[1921]:p.197, 訳267頁)と指摘していることを受けて、シュンペーターは、『景気』の中で、「もちろん、われわれは、F・H・ナイト教授が信じるように(『リスク・不確実性および利潤』, 1921年, p.197)、企業と家計に、または企業と家計が関与するプロセスについてのあらゆる理論的な理解に全知を帰しようとするのではなく、単に企業と家計が実際に持つており、異なるグループの間で非常に相違のある知識と理解の分量だけを帰しようとするのである」(Schumpeter[1939]:[I]pp.52-53, 訳[I]75頁)と述べている。その理由は、「知識、理解、先見、予想の特定の種類と分量は、……与件の1つである」([I]p.53, 訳[I]75-76頁)と

いうことにある。このように、シュンペーターは、経済主体の知識、理解、先見、予想の分量を分析に合わせてその割合を変化させることができると捉えていた。

- ¹²⁾ たしかに、シュンペーターが、『景気』の中で、「実際には極めて重要な若干の要素——顕著なのは、診断もしくは予測上の間違いやその他の過ち——がないものと、最初〔第1次接近〕のうち、仮定したいと思う」(Schumpeter[1939]: [I]p.130, 訳 [I]192頁)と述べているため、これを額面通りに受け取ると、Brouwer ([2002]: p.92) による、シュンペーターが企業者へ融資する銀行家の行なう選択に無謬を仮定しているという解釈は、第1次接近に限定するならば、成り立つ。しかし、楠木[2012]の分析が明らかにしているように、第1次接近における論理的整合性を精査したならば、「彼〔シュンペーター〕が設定した経済発展論における動態の純粋モデル——第1次接近——の理論的枠組み内では、原理的に銀行家は革新を事前に審査できない」(70頁)のである。くわえて、「純粋モデルを離れた不確実性の充満する世界における銀行家を描写する際には、……革新を完全に審査できるとは限らないことをシュンペーターは認めている」(70頁)のである。
- ¹³⁾ シュンペーターは、次のように、発展がなければ、利潤だけでなく利子も存在しないと指摘している。「……発展がなければ利子は存在しないであろう。利子は発展が積み重ねる経済価値の大海における波濤の一部である」(Schumpeter[1911]: S.345)。
- ¹⁴⁾ ナイトは、「完全競争を実現するためには、静的状態を仮定することが必要だと分かった」(Knight[1921]: p.198, 訳268頁)と述べている。
- ¹⁵⁾ ナイトは、次のように説明している。「われわれが『統御』と呼ぶものは、主に『統御すること』を遂行する誰か他の人を選択することからなる」(Knight[1921]: p.291, 訳367頁)。そして、「すべての人生問題と同じように、事業活動の実際的な諸問題の大部分のような、この予見できない状況を扱うための人間の能力を選択するという問題は、解決に関して、パラドックスと明らかな理論的不可能性をともなう」(p. 298, 訳374頁)。したがって、「われわれは、人の意見と能力の評価に対する見解を、人格を判断する直観力によって形成する」(p.293, 訳369頁)。

- ¹⁶⁾ ナイトは、「援助なしにこのような保証ができない企業者には、誰もなりえない」(Knight[1921]: p.289, 訳362頁)と指摘している。それゆえ、もし企業者自身が生産用役の所有者に対して所得を保証するだけの十分な担保能力を所有していないのであるならば、外部の誰かを説得して、なんらかの所得を支払うという条件のもとにその保証能力を引き受けてもらう必要がある (p.279, 訳352頁)。
- ¹⁷⁾ ナイトの場合には、企業者になる条件として、責任ある統御だけでなく、失敗の損失を負担することも必要とされていた。それゆえ、株式会社における雇われた経営者を考える際には、経営者ではなく、経営者の人選という責任ある統御を担うとともに、失敗の損失を最終的に負担する株主が企業者と看做されることになる。この構図を敷衍することでシュンペーターの損失を負担しない企業者と信用創造によって融資する銀行家との関係を捉えたならば、企業者を人選するという責任ある統御を担うとともに、失敗の損失を負担するという点において、銀行家は、ナイトが定義する意味における企業者ということになるであろう。
- ¹⁸⁾ シュンペーターは、「ここで『支出』とは、企業者が生産のために直接あるいは間接に費やすすべての費用である。この場合、企業者の固有の労働用役に対する適当な賃金、彼に属する土地に対する適当な地代、最後にリスクプレミアムもこれに加算すべきことを忘れてはならない」(Schumpeter[1911]: S.278-279)と述べている。

【参考文献】

- * 引用文中の〔 〕は、引用者による補足である。
なお本稿における訳出は、必ずしも併記した邦訳書に従っていない。
- Blitch, C.P.[1995], *Allyn Young: The Peripatetic Economist*, Palgrave Macmillan.
- Brouwer, M.T.[2002], Weber, Schumpeter and Knight on Entrepreneurship and Economic Development, *Journal of Evolutionary Economics*, 12 (1 - 2): 83-105.
- Hart, N.[2012], *Equilibrium and Evolution: Alfred Marshall and the Marshallians*, Palgrave Macmillan.
- Hébert, R.F. and A.N.Link.[1982], *The Entrepreneur*, Praeger (池本正純・宮本光晴訳『企業者論の系譜——18世紀から現代まで』ホ

- ルト・サウンダース・ジャパン, 1984年) .
- Kanbur, S.M.[1980], A Note on Risk Taking, Entrepreneurship, and Schumpeter, *History of Political Economy*, 12 (4) : 489-498.
- Kasper, S.D.[2002], *The Revival of Laissez-Faire in American Macroeconomic Theory: A Case Study of the Pioneers*, Edward Elgar.
- Knight, F.H.[1916], A Theory of Business Profit, A Thesis Presented to the Faculty of the Graduate School of Cornell University for the Degree of Doctor of Philosophy.
- [1921], *Risk, Uncertainty and Profit*, Dover (奥隅栄喜訳『危険・不確実性および利潤』, 文雅堂書店, 1959年) .
- Marschak, J.[1940], Book Reviews: *Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process* by Joseph A. Schumpeter, *Journal of Political Economy*, 48 (6) : 889-894.
- McKinney, J.[1977], Frank H. Knight on Uncertainty and Rational Action, in *FRANK KNIGHT (1885-1972)*, *HENRY SIMONS (1899-1946)*, *JOSEPH SCHUMPETER (1883-1950)*, *Pioneers in Economics* 37, ed. by M.Blaug, Edward Elgar, 68-82.
- Schumpeter, J.A.[1911], *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1 Aufl. hrsg. von J. Röpke und O. Stiller, Duncker und Humblot.
- [1926], *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung: Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*, 2 Aufl., Duncker und Humblot (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論(上)(下)』岩波書店, 1977年).
- [1935], *The Analysis of Economic Change*, in *Essays on Entrepreneurs, Innovations, Business cycles, and the Evolution of Capitalism: Joseph A. Schumpeter*, ed. by R.V.Clemence, Transaction Publishers, 134-149 (金指基[編訳]「経済変動の分析」『景気循環分析への歴史的接近』所収, 八潮社, 1991年: 43-70) .
- [1939], *Business Cycles: A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 2 vols, McGraw-Hill (吉田昇三[監修]・金融経済研究所訳『景気循環論 I-V』, 有斐閣, 1958-1964年).
- [1946], Comments on a Plan for the Study of Entrepreneurship, in *The Economics and Sociology of Capitalism*, ed. by R. Swedberg, Princeton University Press, 406-428 (八木紀一郎[編訳]「企業家精神の研究のためのプランへの論評」『資本主義は生きのびるか——経済社会学論集』所収, 名古屋大学出版会, 2001年: 329-357).
- [1950], *Capitalism, Socialism and Democracy*, 3rd ed., Harper Torchbooks (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』(新装版) 東洋経済新報社, 1995年). 原著初版は1942年に出版.
- [1954], *History of Economic Analysis*, Oxford University Press (東畑精一訳『経済分析の歴史1-7』岩波書店, 1955-1962年) .
- Stolper, W.F.[1994], *Joseph Alois Schumpeter: The Public Life of a Private Man*, Princeton University Press.
- Yagi, K.[2008], Determinateness and Indeterminateness in Schumpeter's Economic Sociology: The Origin of Social Evolution, *Kyoto Economic Review*, 77 (1) : 51-65.
- 池本正純 [2004]『企業家とはなにか——市場経済と企業家機能』八千代出版.
- 伊東光晴・根井雅弘 [1993]『シュンペーター——孤高の経済学者』岩波書店.
- 楠木敦 [2011]「シュンペーターとベルクソン」『経済社会学会年報』33 : 286-293.
- [2012]「シュンペーターの経済発展論における革新と銀行家の関係——ヴィジョンと理論構成の相剋をめぐって」『季刊 経済理論』48(4):64-74.
- 黒木亮 [2001]「フランク・ナイトにおける企業者と競争的経済秩序——『リスク・不確実性および利潤』の意義をめぐって」『経済学史学会年報』40 : 43-55.
- 酒井泰弘 [2010]『リスクの経済思想』ミネルヴァ書房.
- 武田壮司 [2010]「シュンペーターにおける発展プロセスの不確実性——創造的破壊の時間と空間」『季刊 経済理論』46 (4) : 77-89.
- 本吉祥子 [2003]「シュンペーターの危険負担概念——カンバーへの反論」研究年報『経済学』(東北大学) 65 (2) : 25-35.
- 八木紀一郎 [2004]『ウィーンの経済思想——メンガー兄弟から20世紀へ』ミネルヴァ書房.
- 和田重司 [2015]「フランク・ナイトの不確実性の経済学——イギリス経済学史との比較を念頭において」『中央大学経済研究所年報』(中央大学) 46 : 87-106.

